「わが故郷　隈川の思いで」（抜粋）　隈川尋常小学校第12卒業生　岡本　ユキ

大正末期から昭和初期の学校生活を中心に

はるか向こうに小高い山々が続く森林地帯がある。こｎ森林の奥深い谷間から清らかなせせらぎの水が流れ出てくる。その流れは隈川部落の中央を流れて日吉の部落に入り、常呂川と合流し、オホーツクの大海に流れ出て荒波に乗っていずこかへ去る。

隈川の部落は、この川に沿った細長い地域である。なつかしい故郷の隈川小学校は、その中央に山を背にしてこぢんまりと建てられていた。

私が隈川に在住したのは、57年前２歳の時からである。隈川小学校の設立が認可され、開校された年であると父母から聞かされていた。

（注：大正８年４月24日　手師学尋常小学校所属隈川特別教授場として設立認可・開校
同年５月８日　元笠原農場事務所、掘っ立て草葺き12坪を校舎として開校）

私は幼児の頃、よく母親に手を引かれて学校に活動写真を見に行ったり、浪花節を聞きに行ったりしたことも忘れ得ぬ思い出である。

谷間には福寿草が咲き、すがすがしい春が来て、待ちに待った楽しい入学式の日がきた。えび茶の袴に元禄の着物、髪は昔のまげに丈長のリボンをつけて下駄をはいて日本風そのものの姿で母に手を引かれ、嬉しく嬉しく心をはずませて学校に向かいました。学校では上級生が優しく迎えてくれたことが今でも瞼の裏に残っています。１年生から６年生まで１つの教室であった。永山先生が１人で校長兼小使いであった。先生は優しく育んでくださり、本当に楽しい毎日であった。

（注：永山千嘉治／準訓導　大正13年６月13日～15年３月31日
永山きちの／代用教員　大正13年８月６日～15年３月31日）

夏の道は両側に雑草が茂り、トンネルをくぐるようなところもある。ところどころにイラ草という雑草が１メートル以上ものびて、イタイタとしたとげを持ち、朝夕は真っ黒な毛虫が数知れず活動している。この虫が体につくとイボイボになり痛い。私は何よりもこの虫が大敵であった。地面には無数のアリが群れを組んで走る、大きな赤アリガ頭を上げてゆうゆうと通る。ある時は子熊が細い道を横切る。本当にこの沢道を通る時は命もちぢむ思いがした。こうした細道を通り抜けると学校が見える。我にかえって心もはずむ思いで学校に着く。授業が始まる。修身、算術、国語と全校生徒１つの教室で楽しく勉強をした。先生は優しさの中にも厳しく、本当に差別なく、よく私たちを育んでくれた。今も脳裏に浮かぶ。その永山先生は、私が２年生を終了すると同時に退職された。その後に浜田先生がいらっしゃった。小柄で美しい奥様と子どもと３人である。

（注：昭和２年４月１日　隈川特別教授場が隈川尋常小学校に昇格
浜田議則／初代校長　昭和６年４月８日～22年11月10日）

道端にはタンポポが咲き乱れ、軒下には水仙の花が咲き、農民は畑仕事に励み出す。私が3年生の春である。

隈川に大きな嵐が来た。それは雷をともなっての大雨であった。谷間の残り雪も一度に解けて部落の中央を流れる川も氾濫して、橋はことごとく流されてしまった。雨が上がるや部落の人びとは道路の修理や川には丸太の一本橋をかける仕事に大わらわであった。その橋を1日目は何事もなく渡った。2日目に丸木橋の中央まで行った時、私は足をすべらせて川の中に落ちてしまった。気がついた時は夕方であった。近所の家で手当を受けていた。先生をはじめ、みんな枕元に集まっていた。私が気がついてキョトキョトしているとワッと声を上げて喜んでくれた。川に落ちて8時間も気を失っていたとのことでした。私は母にすがって思わず泣いた。それからは川遊びが大嫌いになった。

全校生徒集合の命令で庭に出る。運動会のおゆうぎのけいこである。屋内運動場がないために、小雨でも外に出る。「古城の月」のおゆうぎのけいこ、来る年も「古城の月」、本当になつかしい思い出ばかり、学校が目に浮かぶ。（略）

翌年、学校が1教室増築された。先生も2人になった。

（注：昭和4年3月26日　便所改築落成　　昭和8年7月5日　校舎増築落成13坪半）

農家も多数となり、生徒も増える。隈川の地も大いに開拓され、ハッカの名産地として有名になる。ハッカの模範村として見学に来る人も数多く、景気も良くなって村人も活気づく。山林も開墾されて広々とした畑と変わり、道路も良くなる。

こうした最中、私たちの卒業式が来た。卒業生は14人であったと記憶している。厳粛な式典の中に卒業証書が手渡され、校長先生の式辞、祝辞と続く。最後に「蛍の光」で送られ、6年間の小学生生活も涙涙で母校を去った。

（注：第12回卒業　昭和6年3月　卒業生13人
学校長／松本良太：日吉小と兼任　担任／伊藤克逸）

当時、進学する人は1人もなく、全員家事手伝いである。女は女子青年団、男子は男子青年団に入会して青春時代の修養期に入った。（注：大正9年6月11日隈川青年団結成・昭和3年2月13日隈川女子青年団結成）

お正月は楽しくカルタ大会、夏は小学生とともに運動会と何事も先生を中心に学校に集まる。冬は吹雪の時も馬そりに乗って鈴の音も軽く学校に集まり、社会勉強にと励んだ。こんな風景は田舎でなければ味わうことはできないであろう。

間もなく戦争が始まる。私たちの青春時代は戦争の最中であった。学校を中心として先生の指導で慰問袋作り、慰問状を書く。戦場の兵隊さんたちを慰めるためである。そして銃後を守ることに専念した。

昭和14年の春、戦争の最中に、私は結婚のため隈川を去りました。（略）

『吉野小学校・登小学校閉校に当たって　思いで』掲載　（昭和51年3月発行）

※注：記憶と事実が違うところが数ヶ所ありますが、学校を中心とした濃密な日常があった証ではないかと思われます。